



# 賤ヶ谷にて

1月30日

Sudden Fiction Project

高階 經啓  
hirotakashina

## 1月30日のおはなし「賤ヶ谷にて」

北陸の方に独立国ができたと聞いたので友人と誘い合って行ってみることにした。

電車を乗り継いで新潟県に入ったあたりで、検札の省略を告げにきた乗務員をつかまえてそろそろ独立国かと尋ねたが、さっぱり要領を得なかった。どうも独立国のことを知らなかったらしい。独立国のことを知らない人に向かって「このへんに独立国ができたそうですが、どのあたりですか」なんて尋ねたら、こっちの頭がおかしいと思われても仕方ない。事実その乗務員は怯えたような表情を浮かべてそそくさと隣の車輻に移ってしまった。近くで聞いていた人たちも似たような反応を示し、気がつく和我々は非常に浮いた存在になっていた。別に元々目を合わせていたわけじゃないが、気分的に「目を合わせないようにしている」気配がひしひしと伝わってくる。大層居心地が悪い。

ともかくにも北陸をめざそうというので北陸本線に乗り換えて、もうあまり迂闊な発言はするまいと黙って乗っていたら眠ってしまった。富山を過ぎ高岡のあたりで電車を乗り換えたような気もするがその辺があまり定かじゃない。ああここだ、などと思って電車を降りて、駅前の乗り場からタクシーに乗って、おそろおそろ「なんか噂できいたらこのあたりに」と話し始めると「ああ賤ヶ谷」とさえぎられた。

「シズガヤ？」

「はい。独立国のことですよ。ご案内しますよ」と言われた。

あ、ここでは話が通じるんだと思うと、そういうことでもなかった。

「お客さん東京の方？」

厳密に言うとなたしは東京の出身ではないが、実際いま暮らしているのは東京なので、「はい、まあ」と返事した。

「じゃ、日本からだ」

こともなげにタクシーの運転手が言うのであつけにとられた。

「え？ じゃあここもう」

「そうだよ」

「日本じゃないの？」

「そう見える？」

「……いや」

タクシーの運転手は大笑いして、それから饒舌に解説をしてくれた。このあたりは元々クニの意識が強かったこと、一度だってどこのクニにだって属したつもりはないこと、前の幕府（「前の幕府」と確かに運転手は言った）や明治政府なんかが偉そうにやってきたときもいつだって適当にいなしてきたこと。

「あんたたちだって大陸相手にずっとそうやってきただろ？」

そんなこと言われても相槌の打ちようもない。「ずっと」って、一体いつの時代の話だ。

「だからさ、別に本当は独立なんて言わなくていいんだよ」

運転手は少し苦々しげに言った

「え？ じゃあ独立国って言うのは」

「若いのがさ、勝手に始めたんだよね。独立なんて言っちゃった時点でもう、それまでは属してましたって言っちゃってるようなもんでしょ？ ほんとバカなんだからあいつら」

「あいつらって」

「行政府の奴らですよ」

「ギョウセイフ？」

「なんていうか、独立国の政府です」

「ああ」

「大統領とか首相とか」

「大統領がいるんですか？」

「うちのバカ息子なんですけどね」

「ああ。……ええ?!」

「ま、だからいまはその大統領官邸に向かってるんですが」タクシーの運転手は実に情けなさそうに言った。「要するに、おれんちなんですけどね」

我々は絶句した。絶句すると同時に、ここで初めてこの運転手は頭がおかしいのかもしれないということに思い当たったのだ。さらに追い討ちをかけるようなことが起こった。我々の沈黙をどう受けとめたのか運転手は少しだけ誇らしげに言った。

「ま、だから、あれですよ。おれなんかはバカバカしいと思ってるんですけどね、この車は一応大統領も使う、ほら何て言うんですか? あれです公用車扱いなんです」

「は、はあ」

「そこにミニバーがあるでしょ」

確かに足元にミニバーがついていた。

「中のお酒、好きなようにやっちゃっていいですよ」

「へ、へへへ」

我々は顔を見合わせ、とりあえずミニバーをあけてみることにした。

「この辺あたりじゃ、どんなお酒を造っているん……」

ですか、と尋ねるつもりだったが言葉が続かなかった。ミニバーの中には洋酒のボトルがズラリと並んでいたのだ。それも同じものばかり。ラベルを読むと全部ザ・グレンリベット15年だとわかった。

\* \* \*

タクシーは、いや、大統領公用車は川沿いを上流へと向かい、徐々に周囲の景色が里から山へと変わろうとしていた。溪流の水は澄んで午後早い日差しを受けてきらきらと光の粒を飛ばしていた。周囲の緑が濃くなり、木々の切れ間からくっきりとやけに濃く青い空が見えていた。私は急に不安になってきた。この頭のおかしな運転手は我々をどこに連れていく気なのだろう。不案内な土地でいきなり山奥に連れていかれるほど不安な話はない。誘拐。強盗。拉致。人身売買。臓器売買。死体遺棄。さまざまな不吉な想像が頭を駆け巡る。友人の顔を見るとやはり不安げな表情でこちらを見ていて、私と目が合うと大きくうなずいて口を開いた。

「えっとこれはいったい」

ボトルを一本取り出しながら友人が口ごもった。

そっちかよ。

おまえはそれが不安だったのかよ。

「ザ・グレンリベット15年」すかさず運転手が引き取った。「フレンチオークの新樽で仕上げた個性的な味わい。ザ・グレンリベットは政府公認第一号の蒸留所となり、全てのシングルモルトの原点といわれています。そもそもお客さん、ザ・グレンリベットに定冠詞の『ザ』がついている理由をごぞんじ……」

「えっ。ちょっと待って」気になる単語が出てきたので私は割り込んでたずねた。「その政府と言うのは?」

「政府?」

「いま政府公認って言いませんでした?」

「いや。それはあの、イギリス政府なんですけどね」

「イギリス政府? じゃあここはイギリスの支配下にあるんですか?」

「あーいや」急に運転手の声のトーンが落ちた。「それは別にそういうことじゃ」

「は?」あまりにいい加減な話なのでだんだん腹がたってきて、つい語気が荒くなった。「じゃあなんで」

「あ。着きました」

運転手は言うのと、大きくハンドルを切ってタクシーを敷地内に進めた。我々はあぐりと口を開けてその光景に目を見張った。

我々の乗った車はさきほどまでの渓谷を抜けて、いつしか山の中の湖畔に沿った道を走ってい

たのだが、車はその湖に浮かぶ島に向かって橋に差し掛かったところだった。橋の向こうは巨大な城門になっていて、その島全体がひとつの大きな屋敷になっていた。それはほとんど城と呼んでいい規模のものだった。

「ここはいったい」

ルームミラー越しにちらっとこっちを見た運転手は恥ずかしそうに微笑んで答えた。

「あ、おれんちなんですけどね」

\*            \*            \*

タクシー改め大統領公用車の運転手が言うところの「おれんち」は、小さな町だった。そこにはたくさんの住民がそれぞれの住居で暮らしていて、店舗が軒を連ね、日本の交番も日本郵政の郵便局もあった。城下町と言っていだらう。ただそのすべてが運転手の言う「おれんち」の中にあっただ。ほら話かと思ったらそうではなく、事実そこは運転手一族の土地なのだった。その息子、二十歳そこそこにしか見えない大統領は我々を歓迎してくれ、国賓として扱ってくれた。

もっとも歓待のためと称して連れていってくれたのは城下町にある、大統領お気に入りの焼き肉屋とキャバレーだったのだが。キャバレーでは生バンドがジャズを演奏し踊り子と呼びたいような古風なダンサーによるショーが繰り広げられていた。それはこんな山奥で見られるとは思ってもよらないほど本格的なショーで、我々はまたあぐりと口を開くことになる。若い大統領は人懐っこそうな顔つきで我々の顔を覗き込み目をキラキラさせて、ね、いいでしょ？すごいでしょ？と言う。

「乾杯！」

大統領が手元のグラスを掲げるので我々も慌ててグラスを掲げ口に運ぶ。そしてテーブルに並ぶボトルに気づいて尋ねてみた。

「で、なんでザ・グレンリベット15年なんです？」

「洒落ですよ、洒落」

「洒落とは」

「グレンリベットって、ゲール語で『静かな谷』って意味なんです」

「はあ」

「で、ここはシズガヤ。賤が谷なんて難しい字を書きますが、元々の意味はやっぱり静かな谷です」

「じゃ、15年っていうのは」

「独立して15年になるからですよ」

「え、そんなに？」運転手の口ぶりではつい最近独立したような話だったので混乱した。「じゃ、大統領は何代目なんです？」

「何代目？」若い大統領はちょっと不思議そうに首をかしげてから言った。「ぼくが初代大統領ですけど？」

「だってそんな若いのに」

「やだなあ」青年大統領は明るく笑って言った。「ぼくもう今年で190歳なんですよ」

(「ザ・グレンリベット15年」 ordered by delphi-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

● [「SFPインデックス」](#)

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

## 賤ヶ谷にて

<http://p.booklog.jp/book/43215>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/43215>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/43215>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.